

[学会]

第 434(B) 回千葉医学会例会

第 15 回千葉皮膚科臨床談話会

(1966年6月19日 於 千葉大学附属病院)

1. スポロトリコーシス

荻谷 英郎

スポロトリコーシスは、1898年米国の Schenck が最初に記載して以来、仏、南米、南阿等より多くの発表があり、また、本邦においても、1920年の西沢一田辺の第1例報告以来既に140例を越えている。

当教室外来にて、最近経験した本症のうち2例につき、その臨床、病理組織、菌学的態度につき簡単に報告し、あわせて若干の文献的考察を付け加えた。

第1例は33才男子の左前腕に、第2例は65才男子の右手指より前腕に発症した本症で、ともに外傷の既往があり、臨床的には皮膚—リンパ管型を呈し、病理組織学的には結核結節様所見で、PAS染色にて組織内菌要素たる分芽胞子を見いだしている。また、菌学的には、サブロー培地にて定型的な Colony の発育があり、検鏡にて分生子を附着した菌系型の発育があり、Sporotrichum Schenckii が同定された。(第439回東京地方会において同趣旨のもの報告)

2. 光沢苔癬

伊藤 光政

患者は12才男子(中学生)。家族歴は特記すべきことなし。既往歴：幼少時に水痘に罹患した以外著患を知らず。現病歴：他の皮膚疾患(顔面単純性秕糠疹および急性じん麻疹)を主訴として当科を訪れた際にたまたま発見されたもので、それまでは患者家族ともに本症の存在さえ気付いていなかった。現症：前胸部から前頸部への移行部にかけて、米粒大で白色を帯びた光沢のある苔癬様小丘疹が、雀卵大の斑をつくって集簇している。自覚症状はない。組織所見：表皮下面に密着した、リンパ球、組織球より成る細胞浸潤が限局性に認められる。表皮はそれをおおう部分では、やや扁平化し、基底層の破壊がみられる。浸潤の周辺部では Retezapfen が下向性に伸長して、ボールをかこむような格好を呈している部分もみられる。以上の臨床症状および組織所見から光沢苔癬と診断した。治療として、アシア丸1日4錠ずつを投与して、現在なお経過を観察中である。(東京地方会第440回例会において同趣旨のもの報告)

3. 基底細胞上皮腫

高野 元昭

65才男子。4,5年前より左外眼角上に一小丘疹を認め、自覚症状のないまま徐々に増大し、頂部に潰瘍を生じて受診。示指頭大、暗褐色、半球状で、中央部は陥凹湿潤し、弾性軟、圧痛や局所リンパ節の腫張はない。組織所見は、表皮から真皮深層に達する比較的充実した胞巣構造を示す卵円形の腫瘍で、中央上部の約1/3は壊死脱落し、残存表皮は萎縮性である。胞巣は、間質とは細間隙で分たれ、辺縁部には、細胞間橋のみられぬ円柱形細胞が柵状に並び、塩基濃染の核を有する。胞巣内部は、細顆粒状に明染する核を持ち、胞体相互の境界が不鮮明な細胞で充ちている。間質には、リンパ球、組織球、プラスマ球等の浸潤やメラニンの軽度集積があり、これらの所見から、solid type の定型疹とした。

討 論

山崎：3/4は脂腺排泄管上皮から発生するという説がある。多分化能性細胞から発生するものもある。

今井：Nevoid tumor である。

4. 血管拡張性肉芽腫

滝沢 和彦

患者 9才 男子

初診 昭和41年2月14日

2週間ほど前より、何ら誘因なく下口唇やや右よりに赤色のやわらかい腫瘤発生、かなり急速に大きさをまし、小指頭大に達す。疼痛等自覚症状なく出血しやすいということもない。組織は血管腫構造を呈し腫瘤表面部と腫瘤基底部ではその趣きを異にし、基底部では、内皮細胞の集簇巣であり表面にいくに従って、集簇巣をつくりにくく、内皮細胞がムコイド基質の中に散在、包埋されたように見え、管腔形成はかえって著明になり、Leverの Epidermal collarette がみられる。また肉芽腫様構造はどこにも見当たらなかった。以上から典型的と思われる血管拡張性肉芽腫を報告し、併せて、臨床像、組織像につき、若干の文献的検討を加えた。

討 論

小林：池田、水谷の分類の第一型に相当する。池田、